

# 「COP26」でのボリビア代表演説

「先進国が脱炭素分野でも

途上国を植民地にしようとしている」

<https://www.youtube.com/watch?v=Bz8g5zIMs0k>

11月20日 TBS ニュース提供

## パチエコ＝バランサ主任交渉官（途上国有志連合の議長としての演説）

“2050年までに排出量実質ゼロ”は世界を欺くまやかしです。1.5℃以内に気温上昇を抑えることは不可能です。そのような目標を保ち続けることなどできません。

これは先進国による“大ウソ”です。気候変動の責任からの大脱走なのです。

先進国は、途上国の“カーボン切符”を買い取って、使い続けることができます。そういう態度はフェアではありません。

途上国は先進国に対して、“2050年までに排出量実質ゼロ”ではなくて、「今すぐ排出そのものを削減せよ」と圧力をかけなければなりません。

途上国にとって、気候変動は単に気候の問題ではありません。気候変動は人々の生活の問題であり、サステナブルな発展の問題であり、貧困撲滅の問題でもあるのです。

だからこそ我々は先進諸国に対して、排出削減を強く求め、資金面での関与をさらに拡大するよう、圧力をかけなければなりません。そうすることによって、途上国がさらに発展するための権利を確保し続けることができます。

「炭素植民地主義」の罠を拒否する

私たちボリビア国民は、「途上国有志連合」の議長国でもあります。そのことから、私たちは“炭素植民地主義”の罠にはまることを拒否します。

先進国は気候変動に対処するために、新たな社会ルールを作り上げようとしています。そのルールによれば、先進国のみが低炭素経済に移行できるのです。

なぜなら先進国は、脱炭素社会への移行に必要なだけの資金と技術を持っているからです。それに対し南側世界の国々は資金も技術も持たないので、結局なにもかも先進国に依存することになってしまいます。

とくに問題なのは、先進国の間で、気候変動についての歴史的な責任を認めようとしていないことです。そこからは、途上国に対して「気候変動の負債」を支払う意欲もムードも生まれてきません。

これは残された大きな問題であり、今回のC O Pではないにせよ、今後引き続き取り組むべきものです。(TBS ニュース記)